史跡・今城塚古墳

―― 平成９年度・規模確認調査 ――

1998

高槻市教育委員会

はじめに

今城塚古墳は、淀川北岸で最大級の前方後円墳です。古墳は高槻市域を南北に貫流する芥川西岸の富田台地中央部に位置しています。墳丘は地形を利用して東西方向につくられ、二重の濠をめぐらしています。前方部が大きく発達した古墳の形状や埴輪から、6世紀前半に築造されたことがあきらかとなっています。また『日本書紀』や『延喜式』などの史料の検討から、嶋上郡（現高槻市）にある今城塚古墳こそ、西暦531年に亡くなった継体大王の真の陵墓であると考えられています。

1958年2月18日に国史跡となり、1991年7月20日にはこの古墳の埴輪を生産していた新池埴輪製作遺跡も国史跡になりました。1996年から保存と公開に向けた測量調査や規模確認調査を進めています。

史跡今城塚古墳（1997年2月撮影）

内濠の埋没状況（北壁中央部）

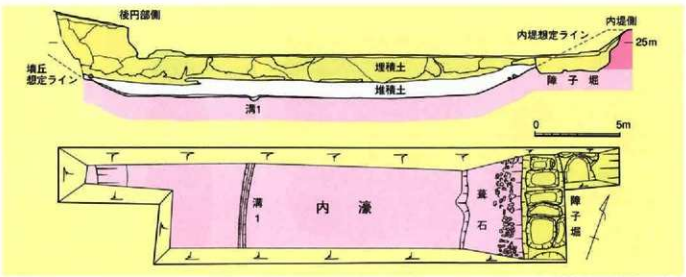
投入したときの衝撃でブロックが割れたり
ヘドロが押し出されています。

調査位置図

内濠は、一辺2～3mの直方体ブロックを、墳丘側から内堤に向け、一気に落としこんで埋め立てたことがうかがえます。

このブロックには0.1×0.4mほどの小土塊を重ねた鱗状の層序がみられるところから、本来の墳丘盛土を切り出したものと考えられます。小土塊には土器片を含むものもありました。

小土塊を積みあげて墳丘を築造する工法は、6世紀中頃の昼神車塚古墳でも確認されています。



トレンチ平面図・断面模式図

内濠から検出した遺構には、葺石と溝があります。

葺石は内堤側と墳丘側で確認したものの、墳丘側はすべて崩落しており、原位置をとどめるものはありませんでした。

内堤側では、墳丘側より小ぶりの人頭大の河原石を、ややまばらに据えてありました。葺石は内堤裾から約１ｍ上方からはじまり、斜面中位で終わっていると考えられます。石材はチャートや珪岩などが使われていました。

また内濠中央付近の濠底では、幅0.5m・深さ0.3mの東西方向 ― 内濠の延長方向 ― の溝を検出しました。断面の形状は逆台形です。墳丘表面からの流入土で溝がほぼ埋った後にヘドロ層が堆積しています。

墳丘裾部では、ヘドロ中層の上面に動物などの足跡が検出されました。なかには人の足跡とみられるものもあります。

左上：内濠側からみた内堤斜面と葺石
左：北側からみた溝１　　下：墳丘裾の足跡と転落した葺石

左：埴輪　約1/4
右：木製の鍬　約1/4

古墳の現状

「今城」の名は、戦国時代に城砦として利用されたことに由来します。墳丘や濠は大規模な改変を受けているものの古墳の形状はとどめています。

1996年に行った測量調査では、古墳築造以後の形状変化の把握に努めるとともに、精密な平面図を作成しました。その結果、古墳の規模は全長350m、全幅342m、墳丘長186mをはかり、後円部は直径100m・高さ11m、前方部は幅141.5m・高さ12mと想定されます。内堤各所では埴輪列を確認、さらにかつて武人と日本最大の家が発見された北側内堤中央部の一画は、堤幅を約6m拡張した埴輪群像による祭祀場と考えられるようになりました。また前方部前面中央の張り出しや内堤に直交する溝は、城砦の築造にともなう遺構とみられます。

測量平面図

規模確認調査

古墳の保存整備に必要な各部のデータを得るため、平面図をもとに1997年から規模確認調査に着手しています。

1997年度は、後円部北東側内濠の幅・深さなどの形状と、墳丘・内堤それぞれの基底部の状況を把握し、あわせて内濠の埋没状況を観察するために行いました。

なお1995年から1996年にかけて、地中レーダー探査や電気探査等が実施されましたが、墳丘構造などを具体的に知るまでには至っていません。

調査区全景（南東側から）

調査風景（東側から）

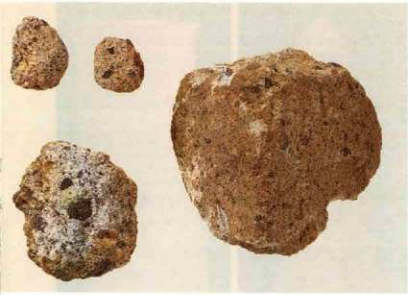
今回の調査では、後円部北東側での内濠の規模や形状のほか、戦国期の改変の状況が明らかになりました。

内濠は、底幅が約20m、深さは現地表面から2.5mあります。断面の形状は逆台形で、層序は上から耕作土(0.2m)、埋積土(1.3m)、堆積土(1.0m) に大別できました。

耕作土は現代の耕土層、埋積土は人工的な埋め土、堆積土は内濠の底にたまったヘドロ層にあたります。

堆積土は上中下の３層に分けられ、内濠が相当長期間水をたたえていたことを示していました。各層から円筒・朝顔形などの埴輪片が出土したほか、下層では木製の鍬を発見しました。中層では大量のドングリなどの植物遺体や倒木が検出されました。上層にはヒシの種子が含まれており、凝灰岩の小片が数点、出土しています。

また堆積土最上位からは、12～13世紀にかけての瓦器椀が出土しています。このほか、墳丘裾付近では動物などの足跡が検出されました。



内濠のヘドロ層から、埴輪片とともに木製の鋤や凝灰岩などが出土しています。

埴輪の大半は円筒埴輪で、朝顔形埴輪も少数みられます。人物など形象埴輪は認められませんでした。円筒埴輪の一部にはヘラ記号のあるものもありました。

鋤は組合せ式です。柄は失われていますが工具痕もよくのこっています。内濠底に接するように出土しており古墳完成時の祭祀に使われたのかもしれません。

凝灰岩は、淡青色で播磨産と考えられるもののほか、二上山産の白色系と阿蘇産のピンク系の3種が確認されています。その後、後円部墳丘で採集された二上山産と阿蘇産のなかには、加工された面をもち、赤色顔料の付着した破片もあり、主体部のあり方も含め、注目されます。

上：凝灰岩1　二上山産　約½　下：凝灰岩2　阿蘇産　約½

凝灰岩3　播磨産約½

城砦遺構は、内濠を埋めた後、内堤に沿って、5m幅の障子堀を設けています。規模は堀底の幅0.7～2m、長さ1.9～2.4mの掘り込みを二列に配し、各掘り込み間に高さ0.5～0.7mの障壁を設けています。

内濠は大きなブロック土で埋められ、上端はデコボコのまま放置されたとも考えられ、障子堀とあいまって敵の進入を妨げたとみられます。一方、後円部側は5m以上も濠側へせり出してブロック土を積み上げていました。

二重濠の古墳自体すでに十分な防御機能をもつにもかかわらずこのような大改造を行う、そこには地形を生かして郭や堀をつくる戦国期の発想を越えた、先進的な築城意識がうかがえます。

北側からみた障子堀

日本最大の家（北側内堤中央部埴輪区）

甲冑を身につけた武人（同左）

円筒（新池遺跡18号窯）

まとめ

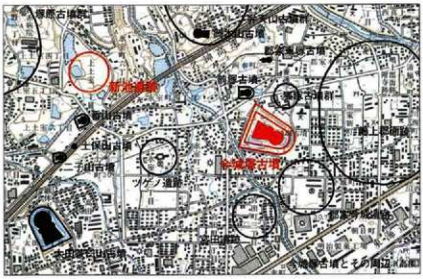
今回の規模確認調査では、後円部側の規模や戦国期の城砦づくりのようすがあきらかになりました。

古墳については、後円部側と内堤側の斜面のはじまる位置が明確になり、後円部の直径はこれまでより7～10mほど小さくなることが判明しました。斜面では葺石も確認しました。内濠の溝は古墳築造過程で掘削されたもので、作業中の湧水や降雨時の排水溝の機能が考えられます。このような例は今城塚古墳ではじめて確認されました。

出土遺物のなかで注目されるのは、3種類の凝灰岩です。これらはいずれも家形石棺の一部と考えられるため、古墳主体部内の埋葬及びその遺存状況が一定推察され、古墳を考えるうえで重要な資料となります。

また、城砦築造にともなう古墳の改造については、固く締まった墳丘の盛土を切り出し、一気に内濠を埋め立てるという大規模かつユニークな土木工法があきらかになりました。その発想と技術、動員力などを考えれば、この改造を成しとげた武将は限られます。有力な候補としては、天下布武をめざして永禄十一（1568）年に摂津へ侵攻、三好勢を一掃した織田信長がまずあげられます。

以上のように、今回の規模確認調査では今城塚古墳の内濠について基礎的なデータを得た以外にも、戦国時代の築城法などについて貴重な知見が得られました。今回確認した城跡は「今城山城（いまきやまじょう）」と命名し、その実体についても今後の調査で解明していきたいと考えています。



史跡・今城塚古墳

所 在 地／高槻市郡家新町
史跡指定／1958年2月18日
1991年7月20日 新池埴輪製作遺跡を追加指定
指定面積／80,632㎡
アクセス／JR摂津富田駅から北へ1.5km、徒歩20分
または岡駅から市バス宗佐原行き
「福祉センター前」下車、徒歩3分

編　集／高槻市立埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台5丁目21－1
TEL 0726－94－7562
発　行／1998年3月30日
印　刷／株式会社　日東印刷
TEL 0726－77－3711